

# 小池辰雄記念図書室だより

2013.12.1(日)NO.16 千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

担当が変わりました。佐藤より石丸へ。

## 1. 旧担当からのごあいさつ

ありがとうございます！ 佐藤仁美(千葉)

良い書籍に囲まれて幸せでした。(読破できた本は残念ながら一冊のみでしたが・・・)。また読書会ご参加の皆様、協力者の皆様との出会いにも感謝しています。お世話になりました。

## 2. 新担当からのごあいさつ

宜しく願います！ 石丸厚子(千葉)

多岐にわたる図書室、友の会、教会のお仕事を仁美さんから受け継ぎ途方にくれて、「神様あ！」叫ぶ毎日です。しかし呼び求める者に必ず助けを下さる神様は、ヨセフと共におられたようにこんな私とも共にいて下さり助けを与えて下さいます。ハレルヤ！主のお名前をほめたたえます。

## 3. 全国の「読む会」

読書会に参加して 瓜生正彦(余市)

私が読書会に参加した理由は、小池辰雄が札幌キリスト召団の源流だからだ。小池辰雄の著書『無者キリスト』に描かれる世界は、神の側から見た世界であり、個人主義的信仰ではなく、己を無にして神の為に生きる世界である。『無者キリスト』の描く東洋的キリスト教と西欧の伝統を受け継ぐキリスト教とは、信仰姿勢に於いて異なっていることを教えられる。ところで、キリスト教世界の中で私達の信仰がどこに位置するのかという事を知っておくことは意味のない事ではない。日本の教会は世界の中にある多くの教会の中の小さな村の一つなのだ。世界にはキリスト教といっても プロテスタント、カトリック、東方教会があり、それぞれの歴史や地域性、民族性などの問題があって、そう簡単に一つになることは出来ない。聖書は「キリストに結ばれて一つの体を形作っており、各自は互いに 部分なのです」(ロマ12:5)と言う。しかし、同じ教会であっても、神学的に全教会が集まり聖餐を共にするこ

とが出来ないこともある。このように考えるとキリスト教の持つ複雑さを感じる。召団の信仰は、一致し得ない壁を突破する起爆剤こそ隣人愛の実践だ、と積極的に問題に取り組むところにある。多様なキリスト教世界の中で召団の位置づけを明確化することは、他の教会を知り、同時に愛する為にも必要な作業である。それが、読書会の重要な所でもあると思う。

## 小池辰雄を読む会

### ●余市

2013年12月1日(日)13:30~15:00

2014年1月5日(日)13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

\*会費:無料(自由献金)

\*連絡先:0135-23-9222(木下)

### ●札幌

\*12月、1月はお休みします。

### ●帯広

### ●北見

\*しばらくお休みします。

### ●都賀

2013年12月7日(土)10:00~12:00

2014年1月11日(土)10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階

\*会費:1000円

\*連絡先:043-235-3815(石丸)

\*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

### ●神戸

2013年12月15日(日)14:00~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸パイルハウス

\*会費:500円(自由献金あり)

\*連絡先:090-9256-4841(田中)

\*隔月開催のため、1月はありません。

\*予習不要・初心者歓迎

図書室便りは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。

### 一流の聖書学者 塚本虎二

小池辰雄伝「その1」に、師・塚本虎二の司式で辰雄・順子は結婚式をした(1933年)、「その5」に、塚本虎二・植木良佐編集の『舊約知識』の中に、辰雄が「詩編研究」の連載を始めた(1934年、辰雄30歳)と書いた。

その後、私はここ小池辰雄記念図書室の書架に、塚本虎二の著書『結婚と信仰』(1933年発行)を見つけた。クリスチャンの結婚は神にささげたものなりと、ずばり。辰雄たちの結婚の司式をした年に塚本はこの本を書いていた。「その11 婚約」で紹介した『羔』(手書き月刊雑誌、毎号120~140ページ)を、辰雄が1年で13号まで出せたのは、塚本先生への無言の誓いもあったからだろうと気がついた。

師・内村鑑三と藤井武を1930年に失ってからの辰雄は3年間一人で日曜をまもっていたが、その間、塚本虎二、矢内原忠雄の編集による『藤井武全集』のお手伝いをしている。やがて塚本先生の聖書講義を聴講すべく丸の内海上ビルに通い始めた。内村・藤井・塚本、3人の師の集会はいずれも、一度たりともつまらなかったと思ったことはないと言っていた。

下の写真は、辰雄と順子が塚本先生を武蔵野の自宅にお招きした夜、灯火の下の一枚である。前列中央の白髪の人が塚本先生(70歳くらい)、向かって右が妻・順子、左が長女・小暮(小池)清子、後列右が辰雄(51歳)、左は次男・照雄。1955年頃だと思う。失明した母のため、自宅の一室を武蔵野福音伝道所とし、聖書伝道の火ぶたを切ってから15年たった。無教会派から離脱して、新たなキリスト道へと進んだ弟子の働きを、塚本先生は慈愛をもって見守っていたのだろう。

「塚本先生の聖書講義は学者として第一級のもの。特に『イエス伝研究』の緻密さ、信仰的洞察と把握のすばらしさは天下一品のものであった。先生の『聖書知識』誌は、藤井先生の『旧約と新約』誌とその内容その性格において相違すること西と東の如くであるところに興味と重要性がある。…塚本先生の随想的文章や思想の味にまた独特のものがある。陳腐なものは一つとしてない。しかもその言説は斬新である」と、辰雄は武蔵野キリスト召団誌『ハレルヤ』(1969年創刊)の第13号に遺している。

ルカ伝15章11節以下の「放蕩息子」からキリスト教の根本義を解いた『放蕩息子とその父』(塚本虎二著・1949年・「聖書知識文庫4」)を読むと、そのすばらしさがよくわかる。

この放蕩息子の譬の前に、二つの譬があるのを見落としてはいけない、と塚本は言う。一つは、失せた一匹の羊を見つけるまではあとを追ってゆく羊飼いの、もう一つは一枚の銀貨をなくしたら燈火をつけて家じゅうを掃き、見つけるまでは探し回る女。二人には「見つけずにおかない」熱心さがあるということ。これは一人の罪人が悔い改めると、天では非常な喜びがあるという譬である。

したがって「放蕩息子」は、人の親の愛の理想を教えようとするのではなく、父なる神の愛の何であるかを示すものだ。神はちょうどこの父親のような方で、人間が神の戒めを無視して自由行動をとろうとすると、お許しにはなるが、その人がもう一度神に戻るように心を砕かれる。そしてもし前非を悔いて帰ってくると、いな、帰ろうとするだけで、もう神の方からかけ出して行って、絶対無条件にその場でさりりと罪を赦して下さる。しかも、神の命令に背かず、まじめに正直にしていた者以上に、それを喜ばれる。私たちの神はこんな愛の父であると教えるのがこの譬話である。だからもし自分の罪に気づいて神に帰るならば、無条件に前非を赦されて神の子たる資格を回復できるのである。瀕死の病人に10分間でキリスト教の大意を話すとするならば、この譬話をするのが多分最も適切であろうと塚本は言う。



武蔵野の自宅に塚本先生を囲んで。